

令和六年七月度 御報恩御講拝読御書

妙密上人御消息

建治二年閏三月五日 五十五歳

已今当の經文を深くまぼり、一經の肝心たる題目を我も唱へ人

にも勧む。麻の中の蓬、墨うてる木の自体は正直ならざれども、

自然に直ぐなるが如し。經のまゝに唱ふればまがれる心なし。当

に知るべし、仏の御心の我等が身に入らせ給はずば唱へがたきか。

令和六年七月度 御報恩御講 『妙密上人御消息』 (御書九六七<sup>六</sup>一二行目〜一四行目)

【通釈】

(法華經の) 已今当の經文を深く守り、一經の肝心である題目を自分も唱え、人にも勧めている。麻の中に生えた蓬や、墨縄で線をつけた木が、それ自体は曲がついていても自然に真つすぐになるようなものである。法華經の教え通りに題目を唱えるならば曲がついた心がなくなる。まさに、仏の御心が我らの身に入らなかったならば(題目は) 唱え難いと知るべきである。

【主な語句の解説】

已今当：已説・今説・当説のことで、已は過去、今は現在、当は未来を指す。法華經法師品第十に「而も此の經の中に於て法華最も第一なり(中略) 我が所説の經典、無量千万億にして、已に説き、今説き、当に説かん。而も其の中に於て、此の法華經、最も為これ難信難解なり」(法華經三二五) とある。「已に説き」とは法華經以前の四十余年の諸經、「今説き」とは法華經の開經である無量義經、「当に説かん」とは法華經の後に説かれた涅槃經を指す。法華經はこれら「已今当の三説」に超過し、信じ難く解し難いとされる。

麻の中の蓬、墨うてる木：曲がりながら生長する蓬が、真つすぐに伸びる麻の中に生えると同じく真つすぐ育ち、木に墨線を記すことで真つすぐに製材できるということ。これは、環境や規律によって人も成長するとの教訓であり、『荀子』の勸学等にある。竜樹の『大智度論』や天台大師の『法華玄義』にも見られるが、大聖人は本抄で、曲がついた心根の者でも仏縁に触れることによつて心が正されることの譬えとして用いられている。

【背景と大意】

本抄は、建治二(一二七六)年閏三月五日、日蓮大聖人御年五十五歳の時、身延の地から鎌倉福谷くわがやつこ在住の妙密上人夫妻に与えられた御消息です。妙密上人についての詳細は不明ですが、本文中に「便宜ごとの青鳧(せいふ)五連の御志」(御書九六九)とあり、度々御供養されていたことがうかがえます。

内容は、はじめに御供養の謝意を述べられ、次いで日本の仏教伝来の様相、さらに末法に上行菩薩が出現し法華經を弘通することを示されます。そして、法華經の題目を弘める大聖人御自身のお立場を「日蓮は何れの宗の元祖にもあらず、又末葉にもあらず」(同九六六)と仰せられています。

一方、日本中の人々が大聖人を憎み、法華經に帰依しない現状を述べられつつ、時が至ればそれらの人々も必ず法華經に帰依するとの末法の本仏の確信を宣べられます。最後に、南無妙法蓮華經の正法が弘まるにしたがい、妙密上人が法華經を信じ、大聖人に御供養を尽くす功德は、ますます大きくなる旨を示され、本抄を終えられています。



## ○自行化他の信心に励もう

御文に「一經の肝心たる題目を我も唱へ人にも勸む」とあります。大聖人の題目が自行化他に亘ることは、『三大秘法稟承事』の「末法に入つて今日蓮が唱ふる所の題目は前代に異なり、自行化他に亘りて南無妙法蓮華經なり」（御書一五九四）との御金言、また何より大聖人御自身のお振る舞いからも明らかです。

その題目の功德について、総本山第六十七世日顕上人は「題目は、自らも唱え、他の人々にも勧めることが大きな功德を積むのである（中略）題目は仏の心そのまま顕れているから、無心に唱えるとき、その心がおのずから衆生の心に入るのである」（すべては唱題から五六）と御教示です。御本尊に向かつて至心の唱題に励むとき、自然と他を救わんとその仏の心が顕れ、折伏を行じること大きな功德を頂戴し、また喜びを感じることで一層自らの信心も深まっていきます。私達は、大聖人の「自行計りにして唱へてきて止みぬ」（御書一五九四）との仰せを誠めとして、唱題を自らの題目行として終わらせることなく、自行化他の実践に勤しんでまいりましょう。

大聖人は本抄末文に「法華經の功德はほむれば弥（いよいよ）功德まさる」（御書九六九）と仰せです。法華經すなわち御本尊の讚歎供養について、まず自身がしっかりと大聖人の教え、御本尊の功德・力用を確信することです。そして、その確信を力に変えて、周囲の人々に日蓮正宗の信仰の素晴らしさを語り折伏を実践することが讚歎供養となります。

もとより広宣流布は御本仏大聖人の御遺命です。私達、日蓮正宗僧俗にとつて重要な使命です。この使命を果たすために折伏を行ずるならば、時に様々な悩みを生じ、中傷を受けることもあるかもしれません。しかし、それらを一つひとつ克服するところに、いよいよ功德を増し、そこに大いなる喜びを享受することができます。またおのずと真の幸せが築かれていきます。私達の信行において、拝読の御文の「經のまゝに唱ふる」とは自行化他の着実な実践であると心得ることが肝要なのです。

この勤行と唱題こそが大聖人様の仏法にとつて最も基本となる信仰の実践であります。「勤行」とは、「勤めて善法を行ずること」を意味し、時を定めて、仏前で読經・礼拝することをいいます。

大聖人は「朝々仏と共に起き、夕々仏と共に臥す」（『御義口伝』新編一七四九頁）と示され、一日の生活を仏とともに送ることを教えられている、

『法蓮抄』には（新編八一八頁）

「毎朝読誦せらるる自我偈の功德は唯仏与仏乃能究尽なるべし。夫法華經は一代聖教の骨髓なり。

自我偈は二十八品のたましひなり。三世の諸仏は寿量品を命とし、十方の諸仏も自我偈を眼目とす」

「方便品」は「十如是」の因果平等を明かす「本末究竟等」まで読んで、「長行」は読んでおりま



せんが。「如来寿量品第十六」は始めから終わりまで「長行」と「偈頌」の全てを読んでいます。

この「寿量品」は、「長行」と「偈頌」(自我偈)から成り立っています。特に「自我偈」は「長行で説かれた内容を重ねて「偈」をもって説かれているものです。「偈」とは「ガーター」の訳語で、「仏様の徳、または教理を讃歎する詩」のことです。つまり、「自我偈」の全体の意は「南無妙法蓮華経即大御本尊」大宇宙・法界の本源であり、「事の一念三千の当体」であり、これ以上の「仏様の当体」はないのであると賛嘆したところが「偈頌」にほかならないのであります。

ついでに申しますと、『御義口伝』の「自我偈始終の事」には

「自とは始なり速成就仏身の身は終りなり始終自身なり中の文字は受用なり、仍つて自我偈は自受用身なり法界を自身と開き法界自受用身なれば自我偈に非ずと云う事なし、ほしいままにうけもちいるみ自受用身とは一念三千なり」(新編一七七三頁)

とあります。即ち、「自我得仏来」の「自」が「自我偈」の始めの文字であり、「速成就仏身」の「身」が終わりの文字です。したがって始めと終わりの文字を合して「自身」となると仰せです。

また「自我偈」全体は、別しては日蓮大聖人御自身のことと説かれているのです。「自我」とは、仏様のご境涯(一念三千)自体のことで、これを説き示したものが「自我偈」であります。そして、始めの「自」と終わりの「身」とを除いた、中のお経の文は全て、「受用」すなわち、仏様の衆生救済活動を意味しているのです。つまり、「法報応の三身如来」の所作のことで、したがって「自我偈」は「自受用身」である、と仰せなのです。また「自我偈」の最後の部分に「每自作是念・以何令衆生・得入無上道・速成就仏身」とあります。

その意味は、「仏様は常に、私たち一切衆生をどのようにならしたら、幸せになる方法を分からせるこ

とができるか、そしてどのようなようにして、少しでも早く成仏させようか、と常に念じ続けておられる」と云う意味のお経文です。

『御義口伝』には「得入無上道等の事」について、

「無上道とは寿量品の無作の三身なり此の外に成就仏身之れ無し、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱へ奉る者は成就仏身疑無きなり」(新編一七七二頁)

とあります。「無上道」とは「これ以上の教えはない」、これ以上の幸福境涯(成仏の境涯)になる教えはないと云う意味です。これを「法」に約せば南無妙法蓮華經であり、「人」に約せば、久遠元初・自受用・無作三身如来即日蓮大聖人のことでもあります。そして、その宝号を南無妙法蓮華經(事の一念三千)というのであります。

故に日蓮大聖人は南無妙法蓮華經こそ、「無上の中の極無上道なり」と仰せられているのです。

『御義口伝』の「無上宝聚不求自得の事」には、

「無上とは南無妙法蓮華經、無上の中の極無上なり。此の妙法を指して無上宝聚と説き玉ふなり。宝聚とは、三世の諸仏の万行万善諸波羅蜜の宝を聚めたる南無妙法蓮華經なり。此の無上宝聚を辛勞も無く行功も無く一言に受け取るは信心なり。不求自得とは是なり。自の字は十界なり。十界各得るなり。諸法実相是なり。然る間此の文の妙覚の积尊は我等衆生の骨肉なり。能く能く之を案ずべし」(新編一七三九頁)

と御教示であります。

南無妙法蓮華經(御本尊)を「受持」(信心)する人もまた、最高の幸福境涯(無上道)を会得していけるのであり、この幸福境涯(即身成仏)を「無作三身」と説かれているのです。



日蓮大聖人こそが、「無作三身の仏様」であり、また大聖人の弟子檀那となって南無妙法蓮華經と唱え奉る大聖人の門下もまた「能所同体の無作三身如来」であり、「即成就仏身」は疑いないと仰せなのです。

このお題目を唱え奉る修行。「唱題」こそが「無上宝聚を辛勞も無く行功も無く一言に受け取る」肝心の仏道修行であります。から、「唱題」によって御本尊と自身が「境智冥合」することが大切でありまして、所願の成就も折伏の成就も、「唱題の功德」によつて、はじめて叶えられるのです。

『如説修行抄』は、御年五十二歳の年に認められ、門下一同に与えられた御書であります。末文の所に「此の書御身を離さず常に御覧有るべく候」とあります所から古来、「隨身不離抄」とも云われ。常に肌身を離さず拝読、仏様の説かれた通りの修行を実践すると云うことでもあります。即ち「説の如く心に修め、身に行ずる」ことです。

『御講聞書』（新編一八一八頁）には

『時を知るを以ての故に大法師と名づく』と説かれたり。今末法は南無妙法蓮華經の七字を弘めて利生得益あるべき時なり。されば此の題目には余事を交へば僻事なるべし。此の妙法の大曼荼羅を身に持ち心に念じ口に唱へ奉るべき時なり。

これ即ち、本門戒壇の大御本尊こそ、成仏得道の大直道と無二に信じて、口に南無妙法蓮華經と唱へ、身に折伏を行じ、一心に成仏を遂げなさいと仰せ遊ばされているのであります。

平安後期の『今様』に謡われた法華經の法文歌

常の心の蓮には 三身(因)仏性おわします 垢つき穢き身なれども 仏に成るとぞ説いたもう